

特 257

98

菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其十五)



始



特 257
98



臨濟宗
管長
菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其十五)



碧巖錄提講

第三十三則 陳操具隻眼

◎垂示

垂示云、東西不辨、南北不分、從朝至暮、從暮至朝、還道伊瞌睡麼、有時眼似流星、還道伊惺惺麼、有時呼南作北、且道、是有心、是無心、是道人、是常人、若向箇裏、透得始知落處、方知古人恁麼不恁麼、且道、是什麼時節、試舉看、

讀方

垂示に云く、東西を辨ぜず、南北を分たず、朝より暮に至り、暮より朝に至る、還伊を瞌睡とは道ふや。』時には眼、流星に似たること有り、伊を惺々と道ふや。』時には南を呼んで北と作すこと有り、且く道へ、是有心か、は無心か、是道人か、是常人か。』若し箇の裏に向つて、透得して始めて落處を知らば、方に古人の恁麼なること不恁麼なることを知らん。』且く道へ、是什麼の時節ぞ。試みに擧す看よ。』

「瞌睡」はネムルこと。朝寢坊、——晝寢坊、——時々起きて居眠をする大の寢坊。——「惺々」は瑞巖禪師の惺々底。ハツキリ、明々白々、事に對して正確鮮明。——「落處」は使

用一ならず。大悟底、明確的、曙光發見。——

提講。垂示は本則に對しての垂示故に、垂示の一句々々一節々々、一々本則の何れに當ると云ふことを明瞭に見定むることが肝要である。それを忘れては垂示の必用なし。——「東西不辨、南北不分、乃至還道伊瞌睡麼。」之是は本則の中の何人を指せし。——「有時眼似流星還道伊惺々麼。」之是は誰のことか。——「有時呼南作北、乃至是常人。」之是は何人ぞ。

サア云うて見なさい。——あて、見なさい。——「若向箇裏云々。」は門下の修行者に向つての教訓。』更に閑言語を添へて見ませう。

「東西不辨、南北不分、」是を愚と云はんか、愚に非ず。是を鈍と云はんか、鈍に非ず。——鈍に似たるが故に鈍と云ふも好し。愚に似たるが故に愚と云ふも悪しからず。何が故ぞ。本來無東西、何處有南北。——「從朝至暮、從暮至朝、」昨日も恁麼、今日も恁麼、去年も恁麼、今年も恁麼。——看よ朝々日出東、夜々月入西。——「還道伊瞌睡麼。」瞌睡に似て睡に非ず。盜賊の晝寢、牡丹花下睡猫兒。——「有時眼似流星、」眼睛突出、——眼光爛々、——兔を見て鷹を、——風を知つて帆を、——之是の人を呼んで。——「還道伊惺々麼。」伶俐なることは伶俐、——銳敏なることは銳敏、——

されど、才士は多く事を過り、智者は却つて失策多し。眞箇の伶俐は敢へて惺々たらず。眞箇の銳敏は寧ろ愚鈍に如同す。——「有時呼南作北、」南を問へば北を答へ、前を聽けば後を教へ、柳樹を指して槐樹と云ふ。可謂、向南見北斗と。恁麼の人は有心か無心か、道人か常人か。——有心と云へば有心の如く、無心と云へば無心に似たり。——有心に非ず、無心に非ず、而して無心、是を眞箇の無心と云ふ。——又有心にして有心に非ず、而して有心、是を眞箇の有心と云ふ。——故に道人に非ず常人に非ず、常人にして道人、道人にして常人。凡か聖か、——愚か智か、——佛眼見る能はず。況んや魔

外に於てをや。——之是を呼んで没量の漢と云ふ。——「若
向箇裏透得始知落處、方知古人恁麼不恁麼。」箇裏とは上來
舉揚したるそれを指す。——以上列舉したる一々は普通人の
一見辨見しがたき處。然るを此はカウ彼はアアと掌中に置きた
る物を見るが如く分明に辨別し得ることが出来れば、諸佛諸祖
方の爲人度生底の方便手段、それらの總てが了々分明になると
云ふ垂示。——「恁麼不恁麼」是は否定と肯定。今はアレもコ
レも、と云ふ輕き意味に採るべし。——

如是、閑言語を吐露するものゝ、要は坐禪々々、すわるがよ
い。すわらなければ心地開發はしません。實際に坐禪の修行を

重ね、自己自身が佛となり祖となり、そのものそれと不二一體、
自他平等、——さなくば、終日説き去り、終夜論じ來ると雖
も、總てこれ無駄、徒に思慮分別を弄するのみ。百千萬劫を經
と雖も眞箇の落處は夢にだも見る能はずと知るべし。——「且
道、是什麼時節、試舉看。」左に舉揚する本則に依り、事實に自己
自身の悟得底を試験し來るべし、と圓悟禪師の大慈悲。——

諸君、諸君は東西辨ぜず南北分たずと云ふ瞌睡の人乎。——
或は眼流星に似たる惺々底の漢乎。——又は、有心に似て而
して有心に非ず、無心の如くにして而して無心に非ざる道人乎。
——若しくは、有心にして而して無心、無心にして而して有

心なる常人乎。——自己自身で自己自身の落處を分明に透得するが先決問題。——之是の先決問題の一關を踏破せざれば、陳操と資福の活商量を見ると雖も徒らに見るのみ。聞くと雖も空しく聞くのみ。——畢竟、勞して功なし。——

◎本則

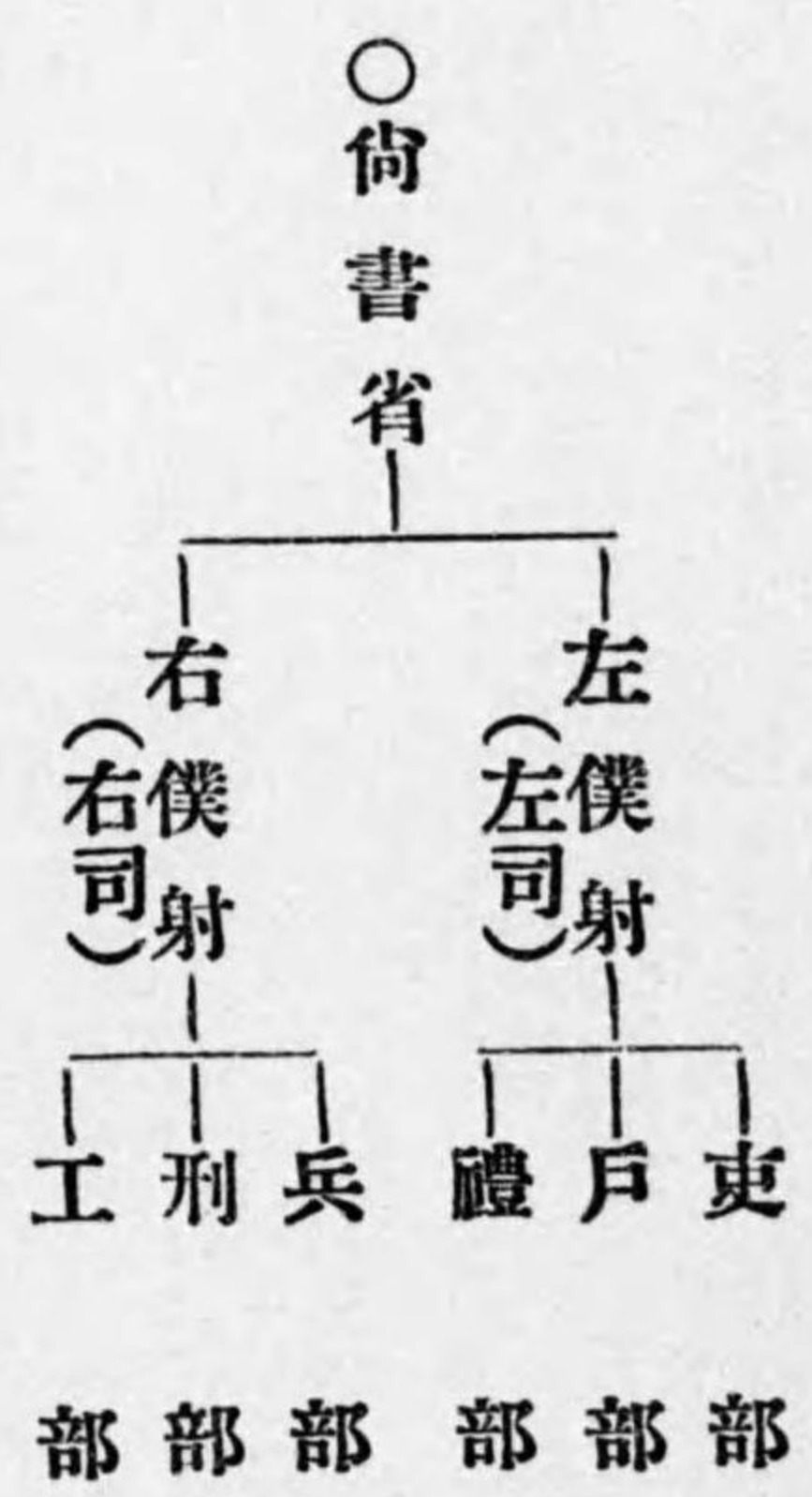
舉、陳操尙書、看資福、福見來便畫一圓相、操云、弟子恁麼來、早是不著便、何況更畫一圓相、福便掩却方丈門、雪竇云、陳操只具一隻眼、』

讀方

舉す。陳操尙書、資福に看ゆ。福、來るを見て便ち一圓相を畫す。操云く、「弟子恁麼に來る、早く是便を著けず。何に況んや一圓相を畫するをや。」福、便ち方丈の門を掩却せり。雪竇云く、「陳操只一隻眼を具す。」井上君の説明を拜借して、尙書とは如何なる官かと云ふことを左に。

尙書、唐制三省六部の一官。





各部に尙書侍郎がある。陳操はこの尙書侍郎であるから、大した高官ではない。

衲は淺學薄聞、古事には特に暗し。故に井上君の示されたまゝ書寫したるのみ。(依つて説明は略す。)

「陳操」陳は姓、操は名。睦州の刺史たりし時、睦州の記興寺の道明禪師に參じ、其の法嗣の一人たり、と傳燈錄にあります。こゝに尙書とあるのを見れば、尙書までに官が昇進したものと

見える。——「資福」禪師は吉州資福寺の如寶禪師のこと。仰山慧寂の孫弟子に當るさうな。南岳下の第七世、達磨十三代の宗匠。——「看」は訪問と云ふほどのこと。——「圓相」は拂子か棒か或は手で〇を空に畫くことも亦は大地に畫くこともあります。資福禪師が畫かれた一圓相は、拂子であつたか、棒であつたか、將手であつたか、それは知れぬ。而して空に畫いたものか、大地に畫いたものか、それも不明。——されど一圓相を畫かれたことは事實ならん。——「早是不著便、」一口に云へば、參上したばかりでまだ一息も休まぬのに、と云ふ意と見て不可なからん。——「何況」それなのに——なすと

は、と解すべし。』——是より以下提講。睦州の刺史で尙書侍郎の職に居る陳操君が、一日、資福禪師の住居を訪問なされた。福來るを見て、とありますから、寒暖の言葉、相見の禮儀も一切閑却、驀直に一圓相を畫かれたものならん。——此の一圓相は慧忠國師より始めりと云ふ。——一圓相を盡法界又は眞如實相と見ることもある。相手に依り探竿影像とも金剛王寶劍とも無孔の鐵鎚とも變體自由。——資福禪師は自己の見識を以て陳操尙書を探竿影像すると見る、敢へて妨なし。云ひ換へれば資福禪師、一圓相を一箇の照魔鏡となし、陳操尙書の胸宇を透見なさる。——故に陳操尙書、如何に言を左右に托すと

雖も、恁麼の照魔鏡に對しては、寸毫も自己の境界を隱覆する能はず。其の見處、其の力量、細大漏さず歷々分明に映出される。』然るに陳操尙書は、所謂耳を覆うて鈴を盜むの類で、揚言して曰く、「弟子恁麼來、早不著便。何況更畫一圓相。」恁麼の言語、賊後の弓、——笑止々々。——

茲の處へ大内君、陳操尙書に代つて云く、「イヤ拙者が斯様にお伺申したのが早モウ本分に辜いた致し方であると存じまするに、貴僧がまた其のやうな圓相などをお畫きなさるといふことは、甚だ合點のゆかぬことで御座る、と資福の畫いた圓相を猫なで聲で打消してしまつた。」と。果して大内君に恁麼の力

ありや。——然りと雖も資福は資福、陳操の如き瞌睡の漢に逢うて、二の句、否、再舉は無用。福、便掩却方丈門。——實に美事々々。「落花有意隨流水、流水無情送落花。」——德山の無語低頭に似て花簇々、——雪峰の無語歸庵の如くに似て錦簇々、——竹影拂階塵不動、月穿潭底水無痕。——さすがの陳操尙書も茲に於て立ち往生、出るに出不れず、引くに引かれず、轉身の活路が無くなつた。——諸君が若し陳操尙書であつたなら此際此時、如何に進退なさるや。試みに云うて見たまへ。——圓悟禪師、陳操尙書を援助して曰く、賊は貧兒の家を打せず、と。圓悟禪師であれば或は然らん。陳操尙

書に恁麼の見識は其の身を倒懸されても出るものではない。

——可謂、陳操尙書は資福禪師の圈纒(俗に云ふ繩張り)に圍まれた。残念ながら籠城するより外に手段なし。——諸君、他を訪問して恁麼の失敗を招きしこと或は無きにしも非ず。衲なまの如きは曾て度々ありし。今此の則の陳操尙書を見て、氣の毒であり、無念であり、遺憾であり且つ奮慨である。——雪竇せつたう禪師、陳操尙書を評して曰く、「陳操只具一隻眼。」と。——當れり。——圓悟えんご禪師、雪竇禪師を評して、「頂門に眼を具す。」と。如何にも圓悟禪師は頂門に眼を具す。恐入りました。——されど燈籠露柱は暗に冷笑。——陳操尙書只一隻眼を具す、と

は如何。「陳操尙書が資福禪師の圓相に對し、何に況んや一圓相を畫くに於てをや、と把住したる腕力は確實であるが、資福禪師が方丈の門を掩却するに當つての挨拶が一言も無い。それを指して一隻眼あるのみと抑下したのである。」と或人は云ふが、眞箇の處は陳操尙書に逢うて見なければ、である。——それはさうと、資福禪師は瞌睡底か惺々底か。——時に臨み機に應じ、南を呼んで北とす。有心の如くにして而して無心、常人に似て而して道人。或人は云ふ、無礙自在、千手千眼の觀世音菩薩、と。資福禪師、諾するや否や。——然るに陳操尙書は瞌睡底のみにして、眼、流星の活作略なし。——幸に陳操尙書が

一隻眼でなく雙眼を所持して居るならば、龍頭蛇尾の笑を受けず、始めは脱兎、終りは處女、と云ふ誹を招かざりしに。——傍に拂子あり。曰く、然らば曇華禪師、陳操尙書の如く門を掩却された其の場合、如何になし得らるゝや、と。大内君は云く、此の場合、彼に一挨拶を與へて伊をして進むも亦門なく退くも亦路なからしめるであつたに、惜しいことをした、と。——大内君の一挨拶とは抑、如何なることか。——衲には衲の手段あるありさ。——資福禪師再來して門を掩却さるゝ其の時、親しく一挨拶すべし。それまでは天機漏しがたし。——とは云ふものゝ、たしかに資福禪師をして啞然たらしむる活作略あり。諸

君、各自參究して見たまへ。

◎頌

團團珠遶玉珊瑚、馬載驢馳上鐵船、分付海山無事客、釣鼈時下一圈攀、雪竇復云、天下衲僧跳不出、

讀方

團々として珠遶り玉珊瑚。馬に載せ驢に馳し(また)鐵船に上す。分付せよ、海山無事の客に、鼈を釣る時、一圈攀を下せよ。雪竇復云く、天下の衲僧、跳不出。提講。起句の「團々珠遶玉珊瑚、」團々は玉のまるきを云ふ。珊瑚は玉と玉と相打つ音を云ふ。——恁麼の一句は雪

竇禪師が資福の一圓相を形容したるもの。とは云ふもの、玉の外に團々たるものあることを知らねば、眞箇の團々も眞箇の珊瑚も心外の法で、總て是れ家珍に非ず。徒に隣の寶を數ふるのみ。——衲なれば、團々と云ふ處へ、當初只道茅長短、燒了方知地不平、と、——珊瑚と云ふ處へ、春前得雨花開早、秋後無霜葉落遲、と。——要するに、團々は缺くる所なく亦餘る處なし、珊瑚は増すこともなく亦減ずることもなし。——恁麼の團々珊瑚、内外玲瓏、表裏透明、美の更に美、善の更に善なるもの。然れども時に依つては、内外闇黒、表裏不透明、醜の更に醜、惡の更に惡なるものとなるを如何せん。——大

内君は、是は宇宙萬象の本體にして吾人お互の本心本性なり、と云うて居らるゝ。』如何にも御説御尤もであります。敢へて異論なし。されど、乞兒、弄飯碗で、滿腹にはならぬ。——佛教學

者は恁麼の一圓相を佛陀、——如來、——法性、——眞

如、——菩提、——涅槃、——亦是這箇、——主人公、

——簡事なぞと種々様々の名目を附けて居るが、何れも混沌に向つて眉を畫くの笑を如何せん。——秋野師は此の一圓相を廣義に老婆して曰く、世界はこの一圓相の玉遶り玉轉するやうなものだ、太陽も圓相だ、月も圓相だ、地球も圓相だ。——更に曰く、一圓相と云うても圓いものばかりではない、つまり

缺け目のなきものゝこと、茲にある此のコツブも土瓶も缺け目はない、さすれば此のコツブも土瓶も皆一圓相と云ふべきである。(若し缺けたら、缺けてゐたら、一圓相でない。)——更に云く、世界は皆一圓相の顯れである、玄沙禪師の如きは盡十方世界一顆の明珠と云はれたと、古人の語を引いて證明なされてある。』流石に秋野師は言語三昧を得られたお方だけあつて、お言葉が一々一圓相である。——納も秋野師のお手本に依り例の臭口を開き一圓相の一端を形容して見ませう。諸君、笑ふ勿れ。——始めに公用の一圓相、次は私用の一圓相、——云ひ換へれば一は上下を着けたる一圓相、一は裸體の一圓相。——

始めに公用の一圓相。云く、一喝大地震動、一棒須彌粉碎、
 是れ一圓相。——坐斷毘盧頂額、曾不見有佛祖、是れ一圓
 相。——逐鹿者不見山、握金者不見人、是れ一圓相。——
 只有受璧之心、全無割城之意、是れ一圓相。——一願皇帝萬
 歲、二願群臣千秋、是れ一圓相。——臨危而智勇奮、投命而
 高節亮、是れ一圓相。——風定花猶落、鳥鳴山更幽、是れ一
 圓相。——鐘聲來舊寺、月色下新池、是れ一圓相。——笠
 重吳天雪、鞋香楚地花、是れ一圓相。——有水皆含月、無山
 不帶雲、是れ一圓相。——有錢千里通、無錢隔壁聾、是れ
 一圓相。——貪他一粒米、失却萬劫糧、是れも一圓相。——

まだある。

四百餘州を擧る、十萬餘騎の敵、國難こゝに見る、弘安四年夏
 の頃、何ぞ怖れん我に、鎌倉男子あり、正義武斷の名、一喝し
 て世に示す、』是も一圓相。——

かたじけなくも大君の、勅語と共に軍隊に、授け給へる我軍旗、
 光は國の光なり、』是も一圓相。——

萬朶の櫻か襟の色、花は吉野に嵐吹く、大和男子と生れては、
 散兵線の花と散れ、』是も一圓相。——

次は私用の一圓相。云く、雨は降りくる、庭の薪は濡れる、
 背で餓鬼は泣く、飯は焦げる、』是亦一圓相に非ずや。——辛、

苦、つ、く、し、た、櫻、は、枯、れ、て、挿、し、た、柳、に、根、が、つ、い、た、』是、亦、一、圓、相、に、非、ず、や。——その、日、く、の、流、に、揉、ま、れ、角、は、取、れ、て、も、石、は、石、』
 是、亦、一、圓、相、に、非、ず、や。——お、前、百、ま、で、わ、し、や、九、十、九、ま、で、
 そ、ん、な、に、生、き、た、ら、憎、ま、れ、る、』是、亦、一、圓、相、に、非、ず、や。——錦、の、
 こ、し、た、蠶、は、死、ぬ、が、錦、著、る、人、何、の、こ、す、』是、も、一、圓、相、。——ま、
 、『よ、三、升、樽、横、つ、ち、よ、に、擔、ぎ、破、れ、か、ぶ、れ、の、頬、か、ぶ、り、』是、も、一、
 圓、相、だ。——花、が、蝶、か、蝶、が、花、か、來、て、は、時、々、迷、は、せ、る、』是、も、
 一、圓、相、だ。——わ、た、し、や、カ、フ、エ、ー、の、渦、卷、く、煙、泣、い、て、笑、つ、て、
 仇、な、さ、け、戀、の、淺、草、涙、雨、』是、も、一、圓、相、だ。——好、き、な、あ、の、人、
 も、う、來、る、時、分、ナ、フ、キ、ン、た、も、よ、唄、ひ、ま、し、よ、う、よ、お、な、つ、か

し、の、道、頓、堀、よ。』是、も、一、圓、相、の、外、に、非、ず。——好、き、な、あ、の、人、來、
 た、時、は、胸、が、燃、え、ま、す、戀、の、火、に、わ、た、し、や、カ、フ、エ、ー、の、夜、の、蝶、』
 是、も、一、圓、相、の、外、に、非、ず。——鳥、も、通、は、ぬ、八、丈、ケ、嶋、へ、や、ら、る、
 、『此、の、身、は、厭、は、ね、ど、跡、に、残、り、し、妻、や、子、が、ど、う、し、て、月、日、を、送、
 る、や、ら、』是、と、て、も、一、圓、相、の、仲、間、。——何、程、お、隠、し、な、さ、れ、て、も、
 蛇、の、道、蛇、だ、よ、直、く、知、れ、る、お、前、の、浮、氣、を、知、ら、ぬ、よ、な、野、暮、な、わ、
 た、し、と、思、う、て、か、』是、こ、そ、一、圓、相、中、の、優、物、。——笹、や、さ、さ、さ、さ、
 笹、や、さ、さ、笹、は、要、ら、ぬ、か、煤、竹、を、大、高、源、吾、は、橋、の、上、『あ、し、た、待、た、
 る、寶、船、』是、を、一、圓、相、と、云、は、ず、し、て、他、に、一、圓、相、あ、り、や。——
 赤、の、合、羽、に、饅、頭、笠、降、り、來、る、雪、も、い、と、は、ず、に、赤、垣、源、藏、は、千、鳥

足、「酒でまぎらす暇乞、」此の外に斯の如き一圓相なし。

一圓相そのものを數へ來れば無量、無邊、無際、無限。盡十方法界に充滿、否、盡十方法界も。——雪竇禪師、是等の意味より承句に、馬載驢駝上鐵船、と吟じられた。(井上君云く、驢駝は驢駝と同じく驢馬に物を負はせること、と。)此の句に二説あり。一は、大にして且つ重きが故に馬には載らぬ、是非とも鐵船でなければ、と。——二は、數に於て無數であるから馬のみでは不足、鐵船にも、と。——圓悟禪師下語して曰く、許多を用ひて什麼をなす、と。由來圓相は只一、盡大地一顆の明珠、數へることも持運ぶことも出来るものか、——不離當

處、常湛然。——處が馬にも車にも船にも飛行機にも手にも肩にも背にも胸にも、載せらるゝし亦抱くことも出来る。——

誰かある。試みに盡大地一顆の明珠を取持ち來れ。——衲なまは

空手にして粉碎し見せん。——粉碎したらどうなる。あけて

悔しや玉手箱。——陳操尙書は資福禪師の折角くだされた一

顆の明珠を受取り逃がした。——在坐の諸君、衲が即今資福

禪師となり、一顆の明珠たる一圓相を諸君の面前へ畫きだした

ら、諸君ドウなさる。——陳操尙書の二の舞が關の山であら

う。——雪竇禪師は資福禪師の一圓相を受取り、如何に處置

なされた。曰く、分付海山無事客、と。雪竇禪師は至つて無欲、

自己が資福禪師より一顆の明珠を頂戴しながら、右から左、人に分付なさるは如何にも見上げた御人格者。西行法師が鎌倉殿より銀の猫を拜領して直ぐ門前の子供に與へたのに似たりや似たり。あやめ、かきつばた。——分付されても多くの人は、使
用する處か、第一、珠か石かそれを見分ける眼を持たぬであらう。——苟も此の一圓相を受用し得る者は、山に隱遁する人か海に栖居する人の外にはあるまい。(山に隱るゝ人とは、海に栖む人とは、如何なる人ぞ。)普通一般の人は、江上の清風と山間の明月、その團々だんくまたる一圓相すら用ひ得ず。況んや恁麼いんまの一圓相に於てをや。——無事の客とは迷悟凡聖を脱した無

爲無作の閑道人かんだうじんを云ふのである。されど恁麼いんまの人は「不住圓覺伽藍、不守三期禁制」であるから、一圓相の如き猿引き道具は用不着。——故に不本意ながら閑道人に似たる山海無事の客に分付せん、と。何が故ぞ。山に居する獵師は鳥獸を取るに必用、——海に栖む漁人は魚貝を採るに入用。一圓相を圈けん攀はんとなして、(圈は禽獸を入れる檻、攀は絲で物をくゝること、)山に住する人にやらうか、海に栖む人にやらうか、熟慮したる後、海に栖む人に分付することに決定された。海には鼈と云ふ三山を載せて歩く底の大龜がをる。それを生擒いひとらするには此の一圓相にかぎる。(資福禪師曾て憶はざりき、魚貝を採る道具にさるゝ

とは。依つて資福禪師の一圓相を海に栖む無事の客に分付する時、教へて曰く、釣鼈時下、一、圈攀。——若し少女に分付したならば、手玉として、一つとや。——二つとや。——と云ひながら、つくことであらう。——若し青年に分付したならば、打球として、ワン、ツー、スリーと云うて抛つことであらう。若し桶屋に分付したならば、(木に竹の無理を云ふとも、そこが親、いはせておけや誰が笑ふらん。)桶のタガとして使用したであらう。——衲に分付したならば、衲は如何に使用すべきや。——幸に分付されぬから安心。——若し諸君に分付されたら、諸君は如何に使用なさる。——鰕蜆螺蚌を採るには手で

も取れますが、苟も非凡吞舟の大魚を生擒するには圈攀に非ざれば如何ともなす能はず。——それは表面の話。裏面は、小智小見の聲聞緣覺、文字言句に執着して居る學者、それ等を相手にするには何もいらぬ。——されど、絶學無爲の閑道人、没量底の大人物、銅頭鐵額、それを釣出さんと欲せば、之是の圈攀たる一圓相が是非とも入用。——故に雪竇禪師、語端を改めて曰く、天下衲僧跳不出。——資福禪師の如き、宗說雙通、與奪自在の大作家に、此の一圓相を頭から打ちかけられたら、如何なる活衲僧も脱出することは出来ぬ。猫にカン袋、動きはとれぬ。——圓悟禪師曰く、「身を兼ねて内に在り。」豈天

下の衲僧のみならんや。斯く大言豪語なざる御貴殿も同じく跳不出のお仲間だ。——イヤ貴僧のみではない。三世一切の諸佛も歴代の祖師も盡十方法界悉く跳不出。——園悟禪師、唯我獨尊を氣取り門下生に向つて、闍黎還つて跳得出麼、——と。萬像の中獨露身で御座る其の園悟禪師に向つて、「私共は修行未熟にして如何に七顛八倒しても圓相外に跳出することは出来ません。恐入りますが、猊下、我等の爲に試みに跳出のお手本をお示しく下さい。」と、——此の場合、園悟禪師は如何になさるであらう。——敢へて死馬に鞭うたず。諸君、園悟禪師に代つて、跳出底の一句を唱へ來れ。曇華欽んで拜聽せん。以

上三十三則の提講了。

聞く、僞仰宗みやうしゆうに九十六種の圓相あり、と。その九十六は印度の外道の數ひだうに擬したるもの。要は爲人度生ひんとしやうの手段。——故に必ず九十六と制限するに及ばず。八萬四千の法門も一々是れ一圓相、五千餘卷の經文も一々是れ一圓相。お互が朝より暮に至り、暮より朝に至り、毎日々々毎年々々なしつゝある一居一動、一として一圓相ならざるなし。——盡乾坤、盡天地、一草一木、一石一瓦、如何なる微細の物と雖も團々珠遠玉珊々たらざるなし。——玉に就き衲なまが胸中に浮びしまゝを申添へてをきませう。

玉、磨かざれば光なし、光なきを石瓦とす。人、學ばざれば
 智なし、智なきを愚人とす。——從容錄の第二則、達磨廓然
 の垂示に萬松老人曰く、卞和^{はんしやう}三献^{さんけん}未^ま免^{めん}遭^{そう}刑^{けい}、と。卞和^{はんしやう}は荆山に
 行き一箇の玉を得たり。是を時の靈王に献ず。王曰く、玉に非
 ず、石なり、とて卞和が右の足筋を斷つ。(天下盲目多し。)卞
 和、玉を抱へて荆山の下に遁居、次の武王に献ず。武王曰く、石
 なり、玉に非ず、とて卞和が左の足筋を斷つ。(天下明眼少し。)
 卞和泣きく、荆山の下に歸り、天下に玉を知る人なきを歎ず。
 ——更に文王に献ず。文王、磨工を招き琢磨せしむ。果して
 卞和が云ひし如く明玉。是を詩に、「趙氏連城璧、由來傳天下。」

と吟じたのである。連城につき、古人の句に、趙璧本無瑕類、
 相如漫誑秦王、』と云ふがある。相如が秦王の前約を守り、玉と
 城十五と交換せんが爲に、特に玉を持して秦庭に參殿し、恭し
 く玉を王に捧ぐ。秦王、大いに喜び、玉を手に取り、是は是は
 珍無類の明玉、天下一品、と賞讃しつゝ、左右の者と互に見惚れ、
 豫て約束の交換問題を忘れたるもの、如し。(王の心底は城をや
 らずして玉を只捲上げようと云ふ腹である。)茲に於て相如、心
 に思へらく、秦王は約束を破り、玉を只取りにする心算、然ら
 ば我に一策あり、と。曰く、陛下、恐入りますが、其の玉には
 人の眼に見えぬ程の瑕類^{かゐ}があります、一寸お還しく下さい、と。

我が手に取るや、怒髮冠を衝き、曰く、豫て約束、十五城をお渡しくださればよし、左なくば臣が頭、此の玉と共に碎かんと。決死の勢を示すや、王も氣がついたもの、如く装ひ、そのまゝ相如を玉と共に還した、とあります。』それを後世の人が吟じて、趙氏連城璧云々と云うたのであります。——匹夫玉を抱へて罪あり、と云ふ句があるが、或一面から云へば玉は罪惡の根源である。——「夜光投人鮮不按劍、」祝元暢と云ふ人、齊の國へ行く途中、蛇が疵をして苦しんで居るのを見て、如何にも氣の毒に思ひ、所持の神薬をつけ、親切に手當をしてやりました。陰徳あれば陽報ありで、その蛇が暗夜、祝元暢の庭前

にお禮に參上、突然ピカツと光がさすので、是は化物なりと即斷し、刀に手を掛け、出て見ると、化物に非ず、先に世話してやつた蛇が、禮に明玉を口に含んで來たのであつた。——恩を受けて恩を報ぜざる人は慙麼の蛇に對して顔色なし。此の玉が或は車十二乗を照らす夜光玉ではあるまいか。——玉のことにつき左の句がある。

曰く、「須是碧眼胡僧始得。」と。碧眼胡僧とは達磨大師のこと。達磨大師七歳の時、般若多羅尊者に對し寶珠を辯じられたことがある。要を採りて云へば、

一切の光中、心光を以て第一となす、

一切の明中、心明を以て第一となす、
一切の寶中、心寶を以て第一となす、

故に眞箇明玉の鑑定家は達磨大師に限る、と。

諸君、お互は、千金萬金にも換へがたき珍無類、—— 摩訶

不思議、—— 火以て焚く能はず、水以て腐らす能はず、——

展べれば盡法界、卷けば自己方寸、—— 佛にも魔にも、——

鬼にも蛇にも、—— 雨にも風にも、—— 山にも川にも、——

石にも木にも、—— なり得る、一切光中の心光、一切明中の心

明、一切寶中の心寶、それを所持して居る。故に心以外の珍寶

珠玉に迷溺する勿れ。—— 愛醉する勿れ。—— 心以外の珍

器妙品に眼を貸す勿れ。—— 思を傾くる勿れ。—— 自己の
家珍を磨くべし、練るべし、鍛ふべし、養ふべし。—— 之是
は資福陳操兩人の未だ見ざる知らざる一箇の一圓相。

(昭和十二年十一月二十四日講演)

第三十四則 仰山不曾遊山

◎本則

舉、仰山問僧、近離甚處、僧云、廬山、山云、曾遊五老峰麼、僧云、不曾到、山云、闍黎不曾遊山、雲門云、此語皆爲慈悲之故有落草之談、

讀方

舉す。仰山、僧に問ふ、「近ごろ甚れの處を離れたるぞ。」僧云く、「廬山。」山云く、「曾て五老峰に遊びしや。」僧云く、「曾て到らず。」山云く、「闍黎、曾て遊山せざりし。」雲門云く、「此

の語は皆慈悲の爲の故に落草の談有るなり。」

此の則に垂示なし。驀直に本則を提講致します。

此の則に出現して居る人は、仰山、雲門、無名の一僧。――

雲門禪師は五家七宗の其の一たる雲門宗の開祖文偃禪師、前に屢々出てをります。仰山は瀉仰宗の第二祖慧寂禪師にして智通大師、五祖は斷碑横古路と評して居る。字は書いてあるが讀みにくい。境致其の儘であるから取違へるな。そこに大なる力のあることを蹉過してはならぬ。『御注意々々々。――仰山は山の名、袁州にあります。此の人十五才の時、父母に出家の許可を願ふ。父母許さず。十七才の時、自ら手の指を二本切斷し、改

めて父母に出家をせんことを乞ふ。父母其の志の堅固なることを察し是を許す。可謂、法の爲に喪身失命を顧みざる人なり、』と。——聞く、近頃は兵隊に出ることを嫌うて故意に自ら眼を害したり手足を折つたりする丁年者があると。斯くの如きお人は無論日本人ではありませんまい。若し日本人であれば、それは變態精神者。——敢へてかれこれ問題にするに及ばず。されど、同じく身體を粗末にするならば、法の爲、國の爲、社會人類の爲に捨つべし。然らざれば玉碎に非ずして、瓦碎である。瓦碎は瓦全より一層大なる愧と知るべし。——願ふ處は玉碎。

井上君は、仰山禪師が手の指を切られた、それに意見を添へてゐる。(意味を取り、)曰く、「左の手の指であるか、右の手の指であるか、傳はつて居らぬが、惟ふに右の手に庖丁を持ち左の小指と薬指を切つたものであらう。故に黄檗や徳山の如く棒を振廻はさない。これは自然の成行。不具の手で人をナグルのは随分外見のよくないもの。出家せんが爲に指を切つたのは如何にも非常識であるが、不具の手で人をナグラぬ處は確かに常識に富んだやり方だ。」と聊か皮肉に云うて居る。——衲なまは、井上君が恁麼いんまに云はれた其の一言で、井上君は如何にも常識に富んでをらるゝお人であることの一端を窺ひ知ることが出来た。

所謂、其の人の過を見て、其の人の仁を知る。』——聞く、仰山禪師は頗る人情味に濃厚なる人、烏の落した柿を拾つて是を水で洗ひそれを師匠の瀉山禪師に呈供したと。弟子も弟子なら師匠も師匠。瀉山禪師は其の柿を二つに割り、一は以て仰山に、一は以て自己、兩人で一箇の柿を喫せられた、と云ふ逸話があります。昨今師弟の交情、紙よりも薄し。之是の人に瀉仰兩人の爪の垢を吞ましてあげたい。——仰山禪師は唐憲宗元和九年の生れ、示寂は唐昭宗大順元年とあります。趙州從諗禪師の示寂より七年早し。遺偈に、年滿七十七、老去是今日、任性自沈々、兩手舉屈膝、』とあります。

此の則の字解は提講しながら申し上げることに致します。仰山禪師は衲なまの如く止むことを得ず出家したのでなく、眞箇まごの發心、——眞箇まごの出家、——其の上非常な勤勉家、故に出群の正師家たること推さずして知るべし。——恁麼やんまの人の一言一句は悉く金聲玉振、輕々に看過してはなりません。仰山、初めて來訪した僧に問ふ、「近離ちか甚處せんじょ。」どこから來た。敢へて珍重するほどの金言でも玉語でもありません。されど仰山の口より出ますると、水は竹邊より流れ出て冷かに、風は花裡より過ぎ來つて香ばしで、同じ近離ちか甚處せんじょと云はれしそれが、千斤萬斤の重みがあります。——金を試みるには火を以て、人を試みるには

語。此近離甚處と云ふ一問、尋常の間であるが、此の中に容易ならざる風露の香しさも、只ならざる毒箭の響もある。——一名是を釣語と云うて蝦鯨を分つのである。——お互に仰山恁麼の下問に對して何と答ふべきや。口を開けば膽を見る。輕々に開口は出来ませぬ。——此の僧、仰山禪師の響ある問を聞く耳をもたぬ。知らぬが佛。僧云く、廬山。——正直に、廬山から來ました。廬山は江西省にあり。始め匡祐安居したるを以て匡山と云ひ、後、廬祐此の山に入りし故に廬山と稱す。慧遠の白蓮社あり、其の名益々顯る。東坡吟じて曰く、廬山煙雨淅江潮、不到千般恨未消、到得歸來無別事、廬山煙雨淅江潮、』と。

事實のまゝ答へた處へ、圓悟禪師下語して曰く、實頭じつこうの人は得がたし、と。如何にも此の正直そのまゝが自然に本分に契あうてをります。——されど一問一答では本當の處は分らぬ。人を殺さば須く血を見るべし、で、是非とも再勘せざるべからず。故に仰山禪師更に語を進めて曰く、「曾遊五老峰麼。」五老峰は廬山の名所、其の形五人の老人が相揖するが如し、と。(衲なまは不幸にして一回も支那に往きません故に地理に暗し。)廬山に居つたなら定めし五老峰へ遊びに行かれたであらう。——衲なまは茲へ語を下して曰く、前箭は淺し後箭は深し、と。——眞箇のことを云へば何も殊更に五老峰まで往く必用はない。一步々

々に五老峰がある。知るべし、阿彌陀經に西方十萬億土を過ぎ
て國あり、極樂淨土と云ふ。(意味を取る。)然るに無量壽經には、
去此不遠、とあります。亦經に、心淨ければ國土も亦淨し、と
ある。此の五老峰へ遊びに行かれたか、に對しては、没量の
人と雖も往々に蹉過することがある、況んや恁麼の間僧に於て
をや、と云うて措きます。僧曰、「不會到。」五老峰へはまだ行
きませぬ。果然として蹉過し了れり。——脚痕地につかず。
脚下がお留守だ。されど實頭の漢たることを失はず。故に圓悟
禪師曰く、面赤不如語直。——後で赤面するより前に正直
に言ふがよい。——仰山禪師は此の僧の答に張合が抜けたで

あらう。——元來、五老峰と云うて、必ずしも地理上の五老
峰には限らぬ。喫茶喫飯、——一居一動、——一挨一拶、
——總てが五老峰だ。——仰山云く、「闍黎不會遊山。」君は
五老峰に行かぬと。——それでは眞の遊山をしたのではない。
——圓悟、亦茲に語を着けて曰く、惜取眉毛好、』と。云過ぎ
ると眉毛が抜けるぞ。悟の安實は禁じたらよからう。——敢
へて仰山に限らず。何人でも口は是禍門、無口は黄金ぞ。——
されど時と場合に依る。仰山禪師の之是の一句、亦能く人を殺
し亦能く人を活かす。——此の間僧、仰山禪師をして啞然た
らしむる活作略なきが殘念。仰山禪師が折角、爲人の涙を以て、

山に托し脚下に樂地あることを指示されたのに、嗚呼々々。

——諸君、此の僧に代つて一句如何に。一動如何に。云うて見なさい。働いて見たまへ。——このまゝでは仰山禪師、進退きわまり、進むことも退くことも出来ぬ。——大内君は例の文字禪を舉揚して、「此の僧が近離甚處」と問はれた時に廬山と答へた所が、娑婆即寂光淨土と云うたも同様、如何にも上出来。けれども更に一段進んで、それでは五老峰に遊んだか、アノ阿彌陀如來と御懇意でありしか、と問はれた時に、曾て到らず、阿彌陀如來に何も用はありません故にお遭ひ申しません、と答へたら面白かつたであらう。」と、此の僧の力なきを齒痒ゆ

く思うて覺へず恚麼に助言をなされた。——又曰く、「若し黄檗や徳山であつたなら、僧が曾て到らず、と云ふや否や、無論、棒で打つて打つて打ちのめすことであつたであらうに。仰山禪師であつたが爲に、此の僧、幸に棒頭の大難を逃れたが、氣の毒のことに棒より痛き、遊山せず、と云ふ一句を頂戴した。此の僧、仰山の慈悲の親切を或は過つて恨に思ひはすまいか。」と。——老婆々々。——雲門禪師も老婆して曰く、此語皆爲慈悲之故有落草談」と、落草談に落草談を添へられた。——落草と云へば、仰山のみか雲門も圓悟も此の曇華も、一坑に異土なし、落草同穴の狐だ。——とは云ふものゝ、山上の路を

知らんと要せば、須くこれ去來の人なるべし。山に登る路案内は、曾て登り下りした人に限る。往いて聞くも好し。——去つて教ふるも悪しからず。——されど達磨面壁の孤危嶮峻も忘却してはならぬ。——類則がある。序に葛藤を打してをきませう。

馬祖百丈に問ふ、什麼の處より來る。丈云く、山下より來る。祖云く、路上に還つて一人に逢着するや。丈曰く、曾て逢着せず。祖云く、什麼として曾て逢着せざる。丈曰く、若し逢着せば即ち和尚に舉似せん。祖云く、那裏にか這の消息を得來る。丈云く、某甲の罪過。祖云く、卻つてこれ老僧が罪過、と。可

謂、豹隱南山霧、鵬搏北海風、と。打鼓弄琵琶、相逢兩會家、と。

◎頌

出草入草、誰解尋討、白雲重々、紅日杲々、左顧無瑕、右盼已老、君不見、寒山子、行太早、十年歸不得、忘却來時路、

讀方

出草入草、誰か尋ね討ぬることを解せん。白雲重々、紅日杲々、左顧するに瑕なく、右盼すれば已に老いたり。君見ずや、寒山子、行くこと太だ早し、十年歸ることを得ず。來時の路

を忘却せり。』

提 講

「出草入草」是は仰山の遊山と雲門の落草を一句に吟じたるもの。分けて云へば、出草は他受用にして放行、——入草は自受用にして把住。——されど仰山や雲門の如き非凡の宗師家は、出草が即入草、入草が即出草、放行が即把住、把住が即放行。要する處は、臨機應變、應病與藥、爲人度生の手段であり方便である。——故に大内君云く、「師家が入草的に持ちかけても、學者が下機であれば落草談となり、出草的に持ちかけても、學者が上根であれば向上談となる。」と。——如何にもで

あります。恁麼の道理に依れば、出草入草は師家の手元にあります。とは云ふものゝ、實は學者の手元にあるのであります。——聞かずや、佛、一言演說法、衆生隨類各得解、』と。——仁者、是を見て仁と云ひ、智者、是を見て智と云ふ。——「誰解尋討。」仰山の如き、雲門の如き、宗師家の手元は把住かと思へば放行、自受用かと思へば他受用。其の自在、其の圓融、佛と雖も尋討し得ざる處。況んや問僧如き尋常の人に於てをや。如何ともなし得ざるは理の當然である、』と。問僧を抑へ仰山と雲門の兩禪師を托上したるは表面。裏面は、雪竇自ら衲にあらざれば、と云ふ意旨なきにしもあらず。——見よ、雪竇禪師、尋

討の容易ならざるを述べて曰く、白雲重々、紅日杲々。

此の二句、仰山、雲門、兩禪師の境界、一は白雲の無心にして去來するが如く、一は紅日の無我にして八紘を照らすに似たり。

白雲重々は把住にして入草、紅日杲々は放行にして

て出草。故に大内君亦例の無言の言を弄して、「仰山の境

界は、雲に雲が重なつて如何なる望遠鏡でも其の山の色を見る
ことが出来ぬ。又雲門の境界は、朝日がキラ／＼昇つて谷底の
水邊に遊んで居る魚の影が石の上に映るのも能く見えるやうで
ある。」と。如何に仰山が無心でも、雲門が無我でも、白雲
そのもの朝日そのものには及ぶまい、と納は自己を以て他人を

忖度す。されど左顧無瑕、是は仰山。右盼已老、

是は雲門。何れも玉の如く八面玲瓏。何れも老熟、

固、我、意、必、なし。是を廬山絶佳の風景に比し、故實全師

は、「廬山の景色は繪にも畫けぬ、何とも云へぬ。仰山、雲門の境
界も何とも云へぬ。降るやうで照るやうで、白雲の重なりたる
が如きと見れば、又紅日が杲々と照り輝く。坂は照る照る鈴鹿
は曇る。出草の處は白雲重々、入草の處は紅日杲々。何と詞に
述べられぬ。」と述べて居らるゝ。納は茲に於て一言なき能は
ず。曰く、「人の口先について左顧右盼する勿れ。」と。夫自ら衝天の氣あり。佛祖の行處に向つて行かず。

雪竇禪師、大阿の名劍を揮りかざし、出沒變化測るべからざる奇智を以て、フーン遊山で思ひ出した、君不見寒山子。』茲に寒山かんざん大士のことを一寸添へて置きませう。寒山子は何れの人と云ふことか知れませんが。皆謂らく、貧士風狂の士なりと。天臺興縣の西、七十里に隱居す。號して寒巖となす。をりく國清寺に還る。寺に拾得じつとくと云ふ者あり。(是は拾ひ子と云ふ。)食堂を司る。殘餘の菜滓を竹筒の内に收め、寒山來れば是を與ふ。寒山是を負ひて去る。——或は長廊下を徐行して叫喚し、或は快活に獨言獨笑す。時あり、寺僧に逐ひ捕へられて罵り打ちにあふときは、乃ち駐とどまり立ち掌を叩いて呵々大笑。——狀貧子

の如く形容枯悴せり。一言一話皆眞理に合ふ。樺皮を冠となし、布裘破弊、木履地をふむ。常に唱へて云く、咄哉々々とつさいくく三界輪回と。——閩丘胤いんさきに丹丘の薄官を受く。途に臨む日、頭痛甚し。醫師を召して治するに病、轉また重し。時に一人の禪師あり。名を豊干と云ふ。天臺の國清寺より來り、特に茲に相訪ふと。乃ち命じて疾を救はしむ。禪師從容として笑うて曰く、「身は四大、(地水火風、處としてあらざるなし。故に四大と云ふ。)病は幻より生ず。若し是を除かんと欲せば、應まに淨水を用ふべし。」と。淨水を持して禪師に捧ぐ。禪師、水を含んで噴く。暫くにして病去る。乃ち胤に謂ひて云く、「臺州は海嶋にして嵐毒

あり。到る日、必ず須く保護すべし。」胤、問うて曰く、「彼の地に仰ぐに堪へたる賢哲ありや。」禪師云く、「形相を以て之を見れば、其の真相を識るべからず。其の真相を識らば其の形相を見るべからず。若し之を見んと欲せば、形相を取ること勿れ。」

——寒山は文殊、跡を國清寺にのがる。拾得は普賢、狀貧士かたぢの如し。又風狂に似たり。或は去り或は來る。」と。云ひ訖つて辭し去る。胤乃ち臺州に至る。其の事を忘れず、到るの三日、寺院に往きて問ふ。果して豊干の言に合ふ。依つて唐興縣に寒山拾得ありや否やをたゞす。縣の界西七十里の内に當り一巖あり、岩中に貧士あり、と。聞く、國清寺の庫中に止宿する一人の行

者あり、名を拾得と云ふ。胤、往きて禮拜せんと思ひ、特に國清寺に到り寺僧に問ふ、「此の寺に豊干禪師の院ありと。何の處に在る。並に拾得、寒山、現に何れの處にかある。」時に僧道翹なる者あり。答へて曰く、「豊干禪師の院は經藏の後に在り。即今人の住し得るなし。只一虎ありて、をりく此に來り吼ゆ。寒山、拾得の二人は現に厨中に在り。」と。豊干禪師の院に至り房を開けば、唯虎跡を見るのみ。乃ち道翹に問ふ、「禪師いませし日、何の行業かある。」僧云く、「豊干いませし日、唯だ米を舂いて供養することを勤む。夜は乃ち唱歌して自ら樂しむ。」更に厨中に到れば、竈かまどの前に二人火に向つて大笑するを見る。胤、便ち

禮拜す。二人連聲に胤を喝し、互に手を把り呵々大笑叫喚して乃ち曰く、「豊干饒舌々々、彌陀を識らず我を禮して何かせん。」と。時に僧徒奔り集まり、相驚き訝り曰く、「何故に尊宦、二人の貧士を禮す。」——一人乃ち手を把つて走つて寺を出づ。是を逐はしむるに既に寒巖に歸る。胤、重ねて僧に問ふ、「此の二人肯つて此寺に止まるや否や。若し止まらば房を調へて寺に安置せしめよ。」と。云ひ終へて郡に歸り、淨衣二對を製し香藥等を特に送つて供養せし。二人更に寺に來らず。止むを得ず使者をして巖に就き、送りとゞけしむ。すると寒山、高聲に喝して曰く、賊々、と。且つ語を添へて、「汝諸人に報ず。各々努

力せよ。」と云うて穴に入り去る。其の穴自ら合し、更に追ふべき路なし。而して拾得の迹亦尋ねべきなし。——寒山の詩に、

欲得安心處、寒山可長保、微風吹幽松、近聽聲愈好、
下有班白人、嘖々讀黃老、十年歸不得、忘却來時路、
とある處から、雪竇禪師、寒山の遊山は本則の間僧とちがつて行くことが如何にも早い、と、草に入つたり草を出たり、孤峯頂上に登るやら、千丈の谷底に下るやら、自己自身が勝手我儘に遊山をしてをらるゝ。——雪竇禪師が寒山大士か。——
寒山大士が雪竇禪師か。——山が人か、人が山か。賓主互換、

——自他圓融、——如何にも見事々々。』

寒山居士は實に足がはやい、没蹤跡、——足跡がわからぬ。

——と云うて寒山詩の結末二句、十年歸不得、忘却來時路、それを以て此の頌を結ばれた雪竇禪師の腕力は流石々々、と賞讃すべきであります。圓悟禪師、此の處に著語して、「即今什麼の處にか在る。十年歸り得ずと云ふが、今は何處にをらるゝ。」と。諸君あて、見たまへ。大内君は、十方法界無始却來、いつでも悠々と遊山してをらるゝ、と云ふが、それでよろしいか。

——遊山ばかりはして居るまい。庵中閑かに打坐して居ることもあり、——帝釋の冠を打落すこともあり、——花を移

して蝶の到るを兼ねることもあり、——耳あつて曾て聞かざることもあり、——燈籠上に舞をなすこともあり、——井を穿ちて天を鑿開することもあり、——雪を見て疎簾を巻くこともあり、——馬と作つて東家に去り、驢と成つて西家に入ることもあり、——されど處々眞、處々眞、は離れず。——恁麼の處を把住して圓悟曰く、「渠濃自由を得たり。」と。(渠濃とは彼と云ふ程のこと。)彼の寒山子は來時の路を忘却したるが故に斯く自由である。——諸君若し寒山子の如く自由を得んと欲せば、先決問題は忘却々々。須く忘却すべし。——處が容易に忘却が出来ぬ。學問ある人は學問を忘却せず。——

才智ある人は才智を忘却せず。——金銭ある人は金銭を忘却せず。——藝能ある人は藝能を忘却せず。——男は男を忘却せず。——女は女を忘却せず。——宗教家は宗教を忘却せず。——何れも、そのものに執着し、そのものに束縛せらるゝ。依つて天然の自由、本具の自在を活用することが出来ぬ。——支那には、家を移して妻を忘れたと云ふ人がある。是は少々忘れすぎであります。——諸君、山に入つたら山に成るべし。海に入つたら海になるべし。花を見たら花になるべし。月を見たら月になるべし。寒の時は闍黎を寒殺すべし。熱の時は闍黎を熱殺すべし。

い。——さすれば山の時は全宇宙が山、海の時は盡乾坤が海、花の時も月の時も寒の時も熱の時も、その時その時そのものが盡十方方法界となる。之是を眞箇來時の路を忘却したと云ふ。——恁麼の場合を強ひて山中無曆日の境界とも松老雲閑曠然自適とも云ふ。圓悟禪師、一針を下して曰く、「莫做這忘前失後好。」と。寒山大士の如く來時の路を忘却することは無論よいが、健忘性となつてはこまる。煩惱を斷盡するは衆生濟度の爲だ。——それだけ忘却するな。——三世の諸佛も歴代の祖師も、一回忘前失後の場處を経過なされたものゝ、長く其の場に在坐はされぬ。——若し無曆日、曠然自適の處に長く坐

在せば、それこそ獅子身中の虫。佛法を亡ぼす者は外道に非ず、
して之是等の鬼窟裡の漢である。——忘るべきものは忘れ、
忘るべからざるものは忘るゝこと勿れ。了。

(昭和十三年一月二十二日講演)

第三十五則 文殊前後三三

◎垂示

垂示云、定龍蛇、分玉石、別緇素、決猶豫、若不是頂門上
有眼、肘臂下有符、往々當頭蹉過、只如今、見聞不昧、聲
色純真、且道、是皂是白、是曲是直、到這裏作麼生辨、

讀方

垂示に云く、龍蛇を定め、玉石を分ち、緇素を別ち、猶豫を
決するに、若し是れ頂門上に眼を有し、肘臂下に符を有する
にあらざれば、往々、當頭に蹉過せん。只如今、見聞不昧、

聲色純眞。且く道へ、是れ皂か、是れ白か、是れ曲か、是れ直か。這裏に到つて、作麼生か辨ぜん。』

提講兼分解。

「定龍蛇、分玉石、別緇素」似て同じからず、類して異なるもの、其數蓋し枚擧するに違あらず。今暫く其の二三を揚ぐれば、龍蛇、玉石、緇素、それである。但し龍蛇や玉石は、其の形がある故に定め難し分ち易からずと雖も、學者修行者の緇素それに比すれば至つて容易である。——學者の修養底、悟得底に至つては無形である故に、其の黑白を辨別する其の難きこと知るべし。未だ悟らずして而して悟りたるが如き様子をなす

者あり。未だ安心せずして而して安心したるが如き裝をなす者あり。無きを以て有るが如くに、有るを以て無きが如くに、或は辯舌を以て、或は邪智を以て、亦是權威を以て、亦是策略を以て、變化出没なし來る。故に照魔鏡を所持せざる師家は、彼が爲に欺謾せられ彼が爲に愚弄せられざる者、蓋しあることなし。——恁麼の僞にして眞ならず邪にして正ならざる、それを一見辨見、立どころに緇素を別たんと欲せば、學者の來るを見て、いきなり大喝一聲、——然らざれば痛棒、——若くは鐵拳、——さすれば眞僞、邪正、當所に顯然となる。之是は正師家たる者が四來の學人に對し其の機根の大小を鑑識し其

の心行の淺深を辨別する活作略であります。——此の場合、猶豫は大禁物、鬻頭第一、先んずれば人を制す。(猶豫は疑惑の義、猶は獸の名、此の獸至つて疑深し、故に人の音がすると豫め木に登り、愈々安心と見定めて木から降りる、それで猶豫と云ふ。)されど我に頂門上の眼と肘臂下の符がなければ、學人に對して猶豫せざるを得ず、否、七穿八穴、忘前失後すること免かれず。——抑々頂門上の眼とは如何なるものか。眉下に横たはつて居る眼でなし、眉間に豁開してをる一隻眼、是を無眼の眼と云ふ。苟も正師家たるものは必ず所持しをらざるべからず。肘臂下の符、是も亦正師家の所有品。(符とは守り札のこ

と。)此の符を所持して居れば、殺活に於ても與奪に於ても自由自在、總てに於て意の如くならざるなし。此の眼と此の符の有無如何に依り、猶豫不猶豫、蹉過不蹉過が定まるのである。是を得るが爲に雪竇禪師、二十年來曾て辛苦、幾度か君が爲に蒼龍の窟に下る、』とある。其他苟も一宗一派の開祖とならるゝ人は何れも二十年三十年の艱難を喫してござる。牡丹餅でも寢て居ては棚から落ちてはきません。辛苦は成功の元、艱難は安樂の母。辛苦は進んでなすべし。艱難は求めてなすべし。さすれば自然に頂門上に眼が開き、肘臂下に符が出来ます。茲に一學人あり。見聞に於て明了々、聲色に於て白的々、眞箇不昧に

して且つ純眞であれば如何がなすべきや。不昧純眞と云うても似て非なる不昧純眞がある。油斷は大敵。——法眼禪師ですら、夾山禪師の「猿抱子歸青嶂後、鳥含花落碧巖前」と云ふ句を二十年間、境の意をなされたとある。敢へて古人を崇拜するに非ず。容易ならざる一例として諸君のお耳に入れをくのであります。更に諸君に問ふ、不昧とは如何。——純眞とは如何。

——試みに一句を云うて見たまへ。——

不昧純眞の漢に逢著したる場合、間に髪を入れず電光石火裏に是れ皂、是れ白、是れ曲、是れ直、と分けることが出来得れば、苦勞も心配もありません。水乳相合すで見聞不昧であるか

ら直、聲色純眞であるから正、と即断しては後悔の種を蒔きますぞ。——到這裏「作麼生辨。」サア如何に辨別すべきや。——這裏とは辨別なきがたき處、今は文殊無著の問答を指す。諸君、お互が自己悟得底の黑白、邪正、是非、曲直、を辨別せんと要せば、猶豫なく慕直に本則に照し來るが近路であります。

◎本則

舉、文殊問無著、近離什麼處、無著云、南方、殊云、南方佛法如何住持、著云、末法比丘、少奉戒律、殊云、多少衆著云、或三百或五百、無著問文殊、此間如何住持、殊云、凡聖同居、龍蛇混雜、著云、多少衆、殊云、前三三後三三、

讀方

擧す。文殊、無著に問ふ、「近ごろ什麼の處を離れたるぞ。」無著云く、「南方。」殊云く、「南方の佛法、如何に住持せりや。」著云く、「末法の比丘、少しく戒律を奉ず。」殊云く、「多少の衆ぞ。」著云く、「或は三百、或は五百。」無著、文殊に問ふ、「此間如何が住持せりや。」殊云く、「凡聖同居、龍蛇混雜。」著云く、「多少の衆ぞ。」殊云く、「前三三後三三。」提講。無著禪師、文殊大士、その傳記を故大内君の説に依り一應申し上げて見ませう。(其の意味を採りて。)大内君云く、「無著禪師の傳記、極めて不明、故に異説少からず。一説に據

れば、曹溪下の人でなく、荷澤下の人でなく、第四祖大醫道信禪師の法嗣に牛頭山の法融禪師がある、此の人に法を嗣しならん。此の無著禪師初めて五臺山へ登るとき、途中で日が暮れ、止むことを得ず路傍の或寺で一宿。寺僧は老人、而して尋常人に非ず。故に徹夜胸襟を開き互に問答。——翌朝辭し去るに臨み、一童子をして門外に送らしむ。依つて童子に、此の寺は何と云ふ寺、主人公は如何なる人ぞ、と問ふ。童子、門の左右に立つて居る密迹金剛(仁王)を指ざし、其の後を見るべしと云ふ。無著、仁王の後を見ようと思つて、其の方へ首を回らすと同時に、寺も門も童子も共に消散して何ものもなし。只茫茫

然たる一面の原野。——蓋し昨夜對談の僧が文殊大士であつた。其の夜の問答が本則それである。」と。何人も其の實を見たるものなし。——唯無著が自分獨りて斯うであつたと云ふのみ。——故に知るべし、無著禪師は自己心中に文殊大士と問答したので、敢へて他人の關する處に非ず。仍つて風外老師は全部無著の示衆と見るが好いと云うてをらるゝ。——井上君云く、「古田梵仙師の説によると、清凉傳に釋無著は永嘉の人、龍敷寺の停律師に依つて出家、嗣法は金陵の牛頭禪師、とある。若し是が事實であれば、無著禪師は唐の玄宗、肅宗、代宗時代の人、忠國師など、同時代。——フトすると此の則の無著は仰

山慧寂の弟子の無著文喜かも知れぬ。文喜は唐穆宗長慶元年に生れ、唐昭宗光仁三年に示寂す。趙州、雪峰、洞山良价など、同時代。何分にも無著の相手の文殊大士の戸籍謄本が傳はつて居らぬ故に、何れの無著であるか確定することが出来ぬ。——重ねて曰く、「支那佛教史上に、支那政府者が佛教に加へた迫害は随分澤山あります。その中で所謂三武一宗の厄と云ふ大々的迫害がありました。

- 一は、魏武の法難、——北魏の世祖太武帝の大迫害。
- 二は、周武の法難、——北周の武帝の大迫害。
- 三は、會昌の法難、——唐の武宗の大迫害。

四は、後周の法難、——五代の末、後周の世宗の大迫害。

右の四つの大迫害は實に猛烈極まるもので、明治維新の廢佛毀釋に歐洲戰爭を幾分加味した位の殘酷さでありました。それで當時、俗よりなほ俗なる僧侶と伍することを好まぬ清僧や、殺さるゝことを嫌ふ僧侶は、寒山大士の如く、蓮華峰庵主の如く、白雲を友として隱者生涯を送られた。此の文殊大士は何の目的でありしや不明であるが、兎に角、世外に超然たる隱者であつたことだけは確實であります。決して印度渡來の文殊大士ではなし。」と。さう斷つてあります。

臨濟禪師曰く、「五臺山に文殊なし。爾欲識文殊麼、祇爾目前

用處始終不異處々不疑此箇是活文殊。」と。——文殊は自己

の外になし、自己が文殊。——斯く云はゞ、無眼子の輩は直に

崑崙に吞却し去り、自己是れ文殊と思ふであらう。過つて定盤

の星を認むること勿れ。——無著禪師典座たりし時、粥をた

いて居ると、忽焉として文殊が釜の前に現出した。——普通

の人であれば、是は是はと三拜九拜して有難がる處。無著は、

粥をカキまはす杓子で、此の野郎と云うてブンナグツタら消へ

去つた、とあります。此の處、無著上出來々々々、とは云ふも

のゝ、自分が文殊を拵へて、自分が文殊を消したので、別に手

柄にはならぬ。當然たる當然である。聞かずや、若人欲了知

三世一切佛、應觀法界性一切唯心造。——三世の諸佛も亦復如是。信ぜざれば見よ。無門禪師云く、逢佛殺佛、逢祖殺祖、と。——未了悟の漢、濫りに破大乘者となる勿れ。——

此の則につき異説紛々でありますが、恁麼の事は閑話として休憩。——例の通り衲一流の提講を試みませう。

「文殊問無著、近離什麼處。」之是の一言、法戰の序幕。先鞭をつけ機先を制するは正師家の茶飯底。先の出やうで鬼にも蛇にも、臨機應變の探竿。——

「無著云、南方。」或人は云ふ、當時無著は見處も見識も何もない故に、南方、と有り體に云うた、とあるが、果して然るや。

己を以て人を忖度すること勿れ。下々の人に却つて上々智あり。斯く云はるゝ人は、圓悟禪師の著語に、草窠より出頭す、とあるそれを見てではないか。——飯田師は、無著の單に南方と云ひし、それを賞讃して曰く、「達磨は南廣州に來た。祖師門下の事は南方より始つた。只明かに處を云はず南方と云ふところが大きによい。」——或は然らん。圓悟禪師曰く、「大方無外爲什麼卻有南方。」と。——元より然り。されど恁麼の端的は、一所透れば千所萬所一時に透る底の人に向つて始めて云ふべし。無著に對して斯く云ふは、所謂圓孔に方木の感なき能はず。

「殊曰、南方佛法如何住持。」茲に住持とある、此の住持は、現今寺に居住して居る人を住持と云ふ、それとは違ひます。佛法を保護維持して居る、そのことを云ふのである。文殊の意思は、茲で本音を聞かうと云ふ手段。可謂、前箭は軽く後箭は重し、と。——「無著曰、末法比丘少奉戒律。」尋常底。衲なまでも此の位の返辭は出來ます。とは云ふもの、正直に答へた處に無著の眞價がある。古人云く、實頭じつどうの人は得がたし、と。——試みに諸君に問ふ。諸君、無著に代り、文殊の問に何と答ふべきや。濫りに棒を揮つたり喝を下しては無駄であります。——
 「殊曰、多少衆。」戒律を奉ずる其の人凡そ何人程ありますか。

舌頭に骨ありや無しやを試むる底、と飯田師は下語して居らるゝ。——「著曰、或三百或五百。」正直一天張り、聊かも禪機を弄せず、徹頭徹尾、實地々々。可愛、可敬。——
 圓悟えんご禪師は言を下して曰く、「盡是野狐精。」文殊も無著も野狐だ。野狐だ。油斷すると化かさるゝぞ。(第二義門に落ちた。)斯く云はるゝ、圓悟も野狐、お互に眉毛にツバの御用意。——
 「無著問文殊、此間如何住持。」是を、鎗頭を振轉し賊馬に騎つて賊を逐ふ、と云ふ。禪僧には限りません。特に禪僧には此の氣概なかるべからず。アナタの五臺山では佛法を如何に護持なされます。賣言葉に買言葉。斯くあるべし。斯くなかるべか

らず。無著禪師、凡僧と思ひの外、蓋膽毛がいだんもうなしと雖も人を驗こころむる眼あり。若し此の間なければ五臺に遊んで土産なしの手ぶら漢。——可謂、好這一撈、と。——「殊曰、凡聖同居、龍蛇混雜。」拙僧の處には、凡夫も聖人も、迷者も悟者も、張四も李三も、——猫も杓子も、居る居る。——來るものは拒まらず、由來嫌底なし。——之是が我家一流の大乗佛法なり、と云はんばかり。——或人は文殊の此の答を賞讃して曰く、「諸佛の母と云はる、だけあつて文殊はうまい。」——文殊が巖中でくしやみをして居るぞ。——うまいか否や、諸人の點檢に一任す。——圓悟禪師曰く、敗缺不少、と。如何なる處が敗

缺、打てば響かざるを得ず。云ふ勿れ、文殊は進取を轉じて退守となりしと。——斯くあることは文殊百も二百も既に承知。

——されど文殊としては少々手忙しく脚亂る。見苦しいぞ。

見苦しいぞ。——手忙しく脚亂る、處へ髪を入れ、「著云、

多、少、衆。」その凡聖同居龍蛇混雜の數は何程。——無著は文

殊の眞似か、否、文殊の眞似に非ず。無著は無著の劈腹剗心。

——然るに圓悟禪師、「我還我話頭來。」無著のやり方が齒がゆうて見て居られぬ。拙僧が代つてやらう。其の間を我に任せるが好い。任せたら如何がなさる。棒か、喝か。——およこなさい。文殊の手元には金剛王寶劍こんかうおうほうけんがありますぞ。——

見よ見よ、文殊大士の金剛王寶劍を。「殊曰、前三三後三三。」此の三三の數は千手千眼の觀世音も數へ切れまい、と云ふ人がある。何の數へ切れぬことがあるものか。衲、試みに數へて見せよう。一二三四五六、六五四三二一、そらどうだ、數へたらう。——若し不審と思はば、去つて雪竇禪師に問ふべし。雪竇禪師、頌の結句に前三三後三三、と云うてをる。——古人云く、「前三三後三三を知りたくば、昨夜出た星の數と今朝降つた雨の數を知れ。さすれば言うて聞かせてやらうぞ。」と。星の數や雨の數が知れ、ば、敢へて前三三後三三の數を拜聽する必用はない。お月様いくつ、十三七つ。此の數と前三三後三三

と何れが多きや。何れが少きや。諸君、清算し來れ。——「要するに此の公案は無著禪師一人の垂示。語を換へて云へば、無著が文殊と云ふ客を一人つれて來て、一幕の狂言をやつたのである。」と大内君は云うてをる。大内君も文殊と無著を引出して、圓悟と共に舊式の古代劇一幕をやつたが、意外に見物人が少いのみか、評判も、あとは云ふまい。——人は何と云うても委細かまはず、無著は無著、文殊は文殊として、修養研究の材料となす、亦可ならずや。

◎頌

千峰盤屈色如藍、誰謂文殊是對談、堪笑清涼多少衆、前三

讀方

千峰盤屈して色藍の如し。誰か謂ふ文殊是對談せりと。笑ふに堪へたり清涼多少の衆、前三三後三三。』

提講。

「千峰盤屈色如藍。」讀んで字の如し。故に文字の説明は閑却。短刀直入、提講にとりかゝります。千峰盤屈色如藍、是は無著禪師が文殊大士に遭つたと云ふ五臺山の風景、これはくくとばかり花の吉野山、——然らざれば、嗚吁松嶋や松嶋や。敢へて五臺山に限らず、人々の住居して居る處が其のまゝ、清淨法

身毘盧遮那佛の住處にして即常寂光土であることを忘れてはならぬ。——さり乍ら菩提の花は愛著に散り煩惱の草は棄嫌に生ずるを如何せん。——故實全師は、「千も萬も疊み層ねた巒峰、藍を流した如き色、それがそのまゝ、文殊大士だ。」と云うて居らるゝが、諸君には千峰盤屈それがそのまゝ、文殊大士と見えませんか。衲には文殊大士とは見えぬ。山花開似錦、澗水湛如藍、としか見えぬ。——雪竇禪師は二十則に遠山無限碧層々と云うて、それが如來だとも文殊だとも云うて居らぬ。——山は是れ山でよし、川は是れ川でよし。——山に對し川に對し、迷とか悟とか生とか死とか又は煩惱とか菩提とか云うたら、山

の面目を汚し、——川の本領を破る。山に遭うたら山、川に
 遇うたら川、自他全く名相を絶した處に文殊あり如來あり千峰
 あり。強ひて云へば一顆の明珠。——若し信ぜざれば去つて
 次の句に參すべし。

「誰謂文殊是對談。」どこに文殊大士がをる。無著が文殊大士と
 對談したなぞと誰が云うた。夢物語もやすみく云ふがよい。
 圓悟禪師、茲に下言して曰く、設便普賢來也不顧。』拙僧の處
 へ文殊が來ても普賢が來ても七佛が袂を連ねて來ても、我這裡
 用不着、——相見無用、——對談お斷。——果して恁麼
 でありしや。圓悟禪師に問うて見るも敢へて不可なし。聞く、

帝網重々主伴無盡。——亦聞く、佛身充滿法界。然らば塵々
 刹々文殊大士ならざるなし。無著の對談、彼れ是れと云ふは愚、
 人々お互が日々夜々文殊大士と對坐、對談、對食、しつ、
 ある。眞箇の文殊大士を知らずして幻影の文殊と對談など、云
 ふは蹉過に非ずして何ぞや。大失敗だ、大のしくじり。——
 「堪笑清涼多少衆。」轉不轉の處に向つて轉じ來れり。之是の
 一句、重きこと千斤。雪竇禪師にあらざれば蓋し言ふ能はず。
 可謂、雪竇禪師は第二の活文殊と。——笑ふに堪へたりと。
 雪竇禪師は何を笑うた。清涼は五臺山。五臺山は文殊の淨土。
 其の文殊に無著が相見し、而して或は三百或は五百、凡聖同居

龍蛇混雜云々の最後に、前三三後三三と云はれた。それが空前の金言だの絶後の玉語だのと云うて、徒に物を逐うて自己を失却して居る。それがをかしい。

圓悟禪師は恁麼の道理を知つてか或は知らずにか、下語して、且道笑什麼、と、一方は雪竇禪師を呼び、一方は大衆に向つて。

衲は茲に於て覺へず一笑。——圓悟禪師の眞面目で自己胸中の前三三後三三を擧揚してござる、それを笑ふは如何にも失禮であるが、それを笑ふは衲の前三三後三三である。——諸君は衲が笑を亦笑ふであらう。——それも或意味から云へば前三三後三三である。——

雪竇禪師は笑ふ。圓悟禪師は眞面目。無著は或は三百或は五百。文殊は前三三後三三。是れ同か是れ別か。——諸君、龍蛇を定め玉石を分ち縑素を辨別するに當つて豈猶豫すべけんや。速に言へ、速に言へ。——以上是れで本則の提講は終了。』

されど飯田師、元古佛の語を引き老婆して曰く、「此の句を丸呑にすると入地獄如矢。此の法は人々分上に豊なりと雖も、修せざれば顯れず、證せざれば得られず。何れの處にか天然の彌勒、自然の釋迦あらんや。猛省せよ。慚愧せよ。身命を放捨して驀直に去れ。無常迅速、時不待人。今ちや今ちや。」と。

——之是は飯田師の前三三後三三。——或人は云ふ、「前三

三後三三と云ふ意味は、昨日三人程來たと思うたら、今日三人
出て行つた、出る人あり來る人あり、去るを逐はず來るを拒ま
ず、一定の修行者のないこと。」——或は然らん。——序^{ついで}で
あるから申し添へてをきます。

(昭和十三年一月二十九日講演)

387
396

昭和十三年十二月二十日印刷
昭和十三年十二月二十六日發行

發行兼
印刷者

佐々木 四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社内

發行所

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社 考査課

終

